# つながりの子育て

～子どもをまんなかにしたコミュニティづくりを、問いなおそう～

青山学院大学
コミュニティ人間科学部
菅野 幸恵

NPO 法人
青空保育ぺんぺんぐさ
土井 三恵子

理工図書

# つながりの子育て

～子どもをまんなかにした
コミュニティづくりを、問いなおそう～

菅野幸恵
土井三恵子

# はじめに

大学生の娘が『つながっているのに孤独』※という本を持ち帰ってきました。ドキッとしました。ゼミで読み合わせをしている本で、ＳＮＳ（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を深堀りし、読みすすめるうちに、みんなズーンと気が重くなっていくみたい、とのことでした。

いま若者たちは、スマホやＳＮＳの普及で、24時間「つながり続ける」人間関係に囲まれているのだそうです。あちこちで「つながろう」「シェアしよう」という言葉が聞かれる時代。ところが一方で「コミュニケーション力の低下傾向」や「地域社会の希薄化」という社会問題が取り扱われ、そんな社会が育児不安や孤立した育児を招いていると叫ばれています。

このような矛盾をかかえる今だからこそ、あえて『つながりの子育て』というタイトルを、考えました。

子育ては、ひとりだとまさに苦行です。でも、分かち合う仲間がひとりでもいれば、不思議と辛

さは半分に、喜びは倍以上にふくれます。「こう育てたい」「ああ育てなきゃ」ではなく、人と人との関係性が、子どもを育てます。子どもはモノではない、意志と「自ら育つ力」を持った存在であり、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人たち、そして自然と人間たちの関係性が、育ちを大きく促します。そのことを知ると肩の力がふっと抜けて、親も子も見守られる安心感のもとで子育てを味わうことができる。そんな古きよき子育てを、新しいカタチでつくっている全国のとりくみや、生き生きと実践している人たちの声も知ってほしい。

そんな想いをこめて、菅野さんとともに、本書をお届けします。

土井　三恵子

※『つながっているのに孤独―人生を豊かにするはずのテクノロジーの正体』シェリー・タークル（ダイヤモンド社）

# 本書の使い方

●本書は、子どもやコミュニティに関心を持つ学生さんや社会人だけでなく、**子どもの遊び場、地域での子育て、自然の中での子育ての実践をしている（したい）方、子どもに関心のある方、保育者（をめざす）の方、子育て中のお父さんお母さん**にも、たくさんのヒントをお伝えできるかと思います。

●**具体的な子育てを知りたい方は、「実践編」（4章以降）からどうぞ。**序章・1章・2章・3章は、子育ち・子育ての課題についての「理論編」。4章以降は、写真もお見せしながらの具体的な「実践編」です。

●3章以降のコラムは実践者・当事者によるものです。そこから拾い読みしてくださっても構いません。

●取り上げた実践のＳＮＳ等も、巻末に掲載したＱＲコードを読み込むことで見られるようになっています。

●8章の「対談編」を読んでから、気になるところに飛んでもらうのもいいかもしれません。

# 目次

はじめに　土井三恵子

《理論編》

序章　子ども・コミュニティとその源流　菅野幸恵……13

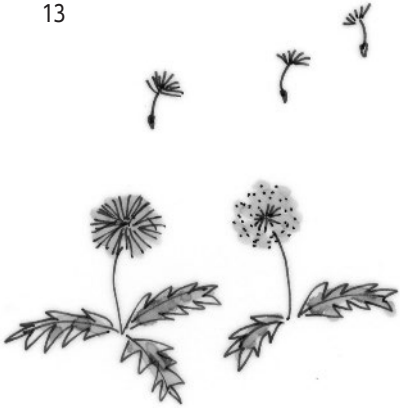
ほどよいつながりのあるコミュニティ／自然の存在としての子ども／子育ち、子育ての課題解決のカギは〝農〟!?／ひととしての根っこが育つ乳幼児期／本書での「自然」のとらえかた

1章　子育てはひとりではできない　菅野幸恵……21

アウェイ育児とは／コペルニクス的転回／子育てのつらさはどこから／子育て支援の主役はだれ？／子育ての私事化／ワンオペとイクメン

2章　地域に遊び場がなくなった　菅野幸恵……31

外遊びをしなくなった!?／遊び場はどう変わったか／遊び環境の変化が、遊びの意欲を低下させる／「お客様」になった子ども／社会がアソビを失った／多大化が生み出す安心安全の過剰、管理／子ども



や社会への信頼の喪失／子どもの危うさを許容できなくなった地域／子どものこころとからだに起こっている変化／危機的状況だからこそ遊びの機会を

3章　子どもには遊びが必要だ　菅野幸恵……47

遊びは人生の予行演習／子どもは〝今〟を生きている／「やってみたい」からはじまる遊び／遊びを通して人生のおもしろさを知る／遊びを通して癒される／遊ぶことでつくられるからだ／外で遊ぶ／遊びは商品ではなく、子どもの権利

## 《実践編》

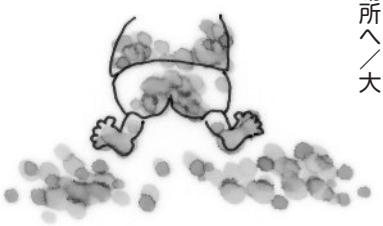
4章　家族以外の人と育つ、育てる
―自主保育という子育ての営み　菅野幸恵……57

フィールドワークを続けるわけ／多様な保育のかたち／既存の保育では満たされないニーズ／自主保育は都心で誕生／自主保育の1日／自主保育はどんな場所で活動しているか／少人数で大丈夫？／運動会はするの？／自分のことは自分でする／遊びに集中できる環境をつくる「見守り」／〝大きな家族〟のようにみんなで育てる／親子の間の風通しをよくする／さまざまな自主保育のかたち／海・山をフィールドにした鎌倉の自主保育／同じ志をもつ仲間とつながる　川崎の自主保育、ちいくれん／しんぽれん／自主保育で育った子どもたち／「学校」に入った後の子どもたち／今の自分をつくってくれ

た／親も一緒に育つ／地域につながり続ける／子どもと親それぞれにとっての自主保育
コラム1　自主保育で大人も育つ、ということ　半田真有……72
コラム2　母ちゃんの背中　大西由紀野……75
コラム3　自主保育の醍醐味　馬場由利枝……79
コラム4　まあるいわっか　吉田奈々……80

5章　地域のなかで育つ、育てる
―冒険遊び場（プレーパーク）の可能性　菅野幸恵……93

禁止事項のない公園？／冒険遊び場のはじまり／日本の冒険遊び場のはじまり／常設のプレーパークの誕生／冒険遊び場の実際／地域に冒険遊び場ができるきっかけ／地域の母たちがつくったプレーパーク／子どもの権利条約と冒険遊び場／子どもにとっての最善を知っているのは子どもである／縁の下の力持ち・プレーリーダー／地域の大人が得意分野を持ち寄る／冒険遊び場での危険管理の考え方／ヒヤリハットの蓄積と共有／事故が起こったら／地域の人びとの理解／遊び場から居場所へ／大人の心の基地になる
コラム5　プールのある場所教えましょうか　糸賀未己子……104
コラム6　やってみたい！　でつながる居場所　林希栄子……111
コラム7　子どもたちに居場所とのびのび遊べる場所が必要だ　川瀬早紀子……122



6章　自然の力を借りながら育つ、育てる
―森のようちえんでの育ちと運営　菅野幸恵・土井三恵子……123
森の幼稚園とは／多様な日本の「森のようちえん」／自然と暮らしと地続きの共同生活的な保育／センス・オブ・ワンダーを育む／自然体験のイベント化／自然のなかで育った子どもの発達
NPO法人青空保育ぺんぺんぐさの実践　土井三恵子……135
新しい形で、地域社会を取り戻したい……135
誰が誰のお母さんだか、わからない／青空保育ぺんぺんぐさとは／「ひとりで子育てしないで」／子育ては、楽しい!?／自主保育でもなく、自然派幼稚園でもなく／古くて新しい子育て
ぺんぺんぐさの「育ち合い」……140
手を出さない、口を出さない、目を離さない。そして、時々大人がガキ大将／小さい子ぐみは、シンプルにくり返しの毎日／大きい子ぐみは、囲われていない自然のなかへ／行事は見せるためでなく、子どもたちと作っていく／安心感が、少子化対策のカギ?／子どもの「自ら育つ力」を信じて見守り、その力を引き出す「自由保育」／安心感は、子どもたちを育てる

地域の課題を解決するために……149
保育者と、メンバーの温度差／「一番育ったのは、母親の私だった」／行政や金融機関に伝わる「言語」
「私たちの」コミュニティにするために……153
コミュニティづくりをはばむものとは／「お客様」をつくらないために／場面場面で言語を使い分ける／「ゆるふわ会議」というコミュニケーション／いままで教わってこなかった？／ワタシを語る、生活者のことばを
コラム8　学生時代よりも学びのあった10年間　井上香織……162
コラム9　ありのままの素朴な、昭和に近いぺんぺん　伊藤和代……163
コラム10　今年もコウに教わったな　平野美穂……164
コラム11　家も外も含めた子育てを、丸ごとの支えになるような保育　中尾聡……165
コラム12　みんなのこれからの人生が、生きやすくなっていく　江頭留依……166
7章　地方での子育ち・子育て――移住という選択　菅野幸恵……167
出生率と就業率の不思議な関係／家族のサポートなしでは子育てできない!?／大都市圏の子育て／地方に問題はないのか／地域ごとの子育て意識の違い／若者・子育て世代に高い地方移住への関心／移住の実際／地方創生と森のようちえん／移住のよいところ、欠点／都市部と地方の遊び（場）の違い／地方の遊び（場）／地方での子育ての可能性

コラム13　心のワクワクを大切に　深澤鮎美……190

《対談編》

8章　対談　～民主主義が子どもを育てる～　菅野幸恵・土井三恵子……191

大切なことって〝面倒くさい〟／民主的に育っていない私たち／覚悟は徐々にできていく／子どもがまんなかだからこそ／代わりが利かないつながりができる／子どもたちの民主主義／自分の軸と調和していく力の両輪が育つ／グレーな出来事で身につく〝生きる原動力〟

おわりに　菅野幸恵……213

付録　各実践団体紹介……219

《理論編》序章

# 子ども・コミュニティとその源流

菅野幸恵

ほどよいつながりのあるコミュニティ
自然の存在としての子ども
子育ち、子育ての課題解決のカギは〝農〟!?
ひととしての根っこが育つ乳幼児期
本書での「自然」のとらえかた

# ほどよいつながりのあるコミュニティ

近年、「つながり」という言葉が多く語られるようになりました。阪神淡路大震災や東日本大震災、コロナ禍以降、人びとが自分の生活の足元を見直し、地方創生のために、地域おこしや、コミュニティ再生に力を入れる自治体も増えています。

コミュニティは日本語で言うと、共同体や地域社会のことです。コミュニティとは「何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」[1]などとされます。似た言葉であるアソシエーション（組織）は、目的と理由を持って存在しています。たとえばオリンピックの組織委員会のように、存在すべき理由があるのです。それに対して、コミュニティは、理由なく存在し、持続していくものです。そこにいると自分の存在に納得できる、つまり自分の存在と切り離せないような集まり[2]が、コミュニティであると言えます。

かつての農村共同体は都市化のなかで地域や自然から切り離され、都市では「カイシャ」や「核家族」といった閉鎖性の強いコミュニティが築かれた[3]と言われます。農村共同体では生活に必要な生産をコミュニティのなかで行っていましたが、都市では生産と生活が切り離され、生産を誰かにお金を介して任せることになります。誰かがしてくれるのは楽だし便利です。ただカイシャや家族の利益が優先される社会では、人びとのつながりは薄れていき、個人の孤立を招くことになりました。

1『コミュニティを問い直す』広井良典（ちくま新書）11頁
2『共同体の基礎理論』内山節（農文協）82頁
3 広井　同掲書9頁

一方、かつての共同体は、人びとをしばるものでもあったのです。近代化をめざす流れにおいて、「共同体」は封建的で、人びとの自由を奪うものであり、解体すべき対象となりました。ところが、近代化の負の部分が見え始めると流れが変わっていきます。自然や労働などについて独自の思想を展開する哲学者の内山節（うちやまたかし）さんは、「人間と自然の関係を問い直そうという問題意識が生まれると、自然と人間が結びなおし、人間と人間が結びなおしていく社会のありかたを共同体としてとらえていくようになった」[4]と、指摘。つながりが強すぎてしがらみのようになってしまうコミュニティではなく、つながりがなさすぎるのでもなく「いいあんばいのつながり」[5]のあるコミュニティが求められているのだと思います。

また内山さんは、日本の共同体の特徴として、自治力の高さを挙げます[6]。武士が都市に移動した江戸時代、幕府は農村を支配しようとしましたが、農民は表向きは従いながらも、さまざまな方法（たとえば隠し田）を駆使して、自分たちの世界を守ろうとしていたそうです。誰かに任せっぱなしにするのではなく、自分たちのことは自分たちで考えていく。そんな姿勢が、これからのコミュニティを考えていくうえで重要です。

新たなコミュニティのあり方を考えていくときに、キーワードになるのが「子ども」です。「子どもと高齢者は地域への土着性が高い」[7]という指摘は大いにうなずけます。子どもや高齢者が活き活きとしている地域は、みんなが活き活きとできます。本書では、「昔はよかった」という素朴な回顧主義に陥らずに、さまざまな実践から新たなコミュニティのかたちを示していきたいと思っています。

4 内山　同掲書28頁
5『コミュニティデザインの時代』山崎亮（中公新書）11頁
6 内山　同掲書91頁
7 広井　同掲書19頁

# 自然の存在としての子ども

「子育ての場は、おとなの文化が子どもの自然に出会う境界だ」[8]と、子育ちや子育ての本質を問い続ける発達心理学者、浜田寿美男（はまだすみお）さんは述べています。子どもは自然の存在であり、自ずから育つ力をもっています。「7つまでは神のうち」ということわざは、神様に頼むほかない領域である自然の営みのなかに、子どもがいることを示しているでしょう。江戸時代の育児書では、たびたび子どもの育つ様子が植物にたとえられていたそうです。そのため日本の伝統的子育て観は、植物（農作物）を育てることのアナロジーでとらえられていたのではないかといわれます[9]。子どもは授かりもの。その育ちは周りがあれこれ手を加えてどうこうなるものではなく、熟す時がくるのをゆっくり待つほかない。このような子育て観は、地域の共同体（コミュニティ）のなかで共有されてきました。一方で、今の社会は、その共有も難しく、暮らしや目の前の子どもから切り離された形で届いた情報ばかりがあふれています。大量の情報は子どもたちの将来を人質にとり、育てる者をのみこもうとします。ひとつ情報に触れるとあれもやったほうが、これもやったほうがと気になって、どんどん足していくことになってしまうのです。そこでは、育つ子どもへの基本的信頼が失われて[10]います。

自然の存在である子どもを育てる営みには、不安はつきもの。周囲と育ち方が少しでも違うと、自分の育て方が悪いのかなと思ってしまいがちです。かつては子育ての責任は養育者だけが背負うものではなく、育てる者の不安を共同体のメンバーが受け止め和らげていました。で

8『〈子どもという自然〉と出会う』浜田寿美男（ミネルヴァ書房）6頁
9『子育ての社会史』横山浩司（勁草書房）186頁
10 横山　同掲書187頁

も今は、なにかあると養育者だけがその責任を問われるので、育てる者は周りの目を気にしてびくびくしながら子育てせざるをえなくなります。その結果、周囲の目を気にするあまり、子どもの自然を待てず子どもの行動を制限し、管理するという悪循環が生まれてしまうのです。

## 子育ち、子育ての課題解決のカギは〝農〟!?

私はここ10年ほど、自主保育や青空保育での子どもの育ちや、そこでの大人同士の関係性を追いかけてきました。四章で詳しく取り上げますが自主保育とは、就学前の乳幼児を親たちが交代で預かり合う保育活動のことです。

２０１０年に茨城大学で開催された「農と心理学」[11]のシンポジウムに参加したときのこと。お話を聞いているうちに「自主保育ってまさに〝農〟じゃん！」とビビッときて、気づけば企画者の石井宏典さん[12]に熱く語っていました。というのも、シンポジウムでは、農という営みを「移動と定住」「消費と生産」「人工と自然」という３つの軸から考え、現代人の生活は、「移動」「消費」「人工」へと傾斜してきたと指摘。多くの人が職を求め都市に向かい、生活に必要なものはサラリーから買い求め、人工的に管理された環境で暮らすようになったという話が展開されていたからです。

このような「農的営み」から「都市的生活」への変化によって、私たちは自然や地域から切り離されるようになりました。その結果、１章から３章で述べるように子育ちや子育てのかたちは大きく変わり、さまざまな課題が生まれます。子どもが育つ、子どもを育てる（つまると

11 日本質的心理学会第七回大会の企画のひとつ

12 社会心理学者。沖縄県本部町備瀬を中心としたフィールドワークを30年以上続けている。

写真序－１　大人も子どもも畑で

ころ人が生きる）営みは、元来「自然」のものです。ヒトの子育ての特徴は共同繁殖にあるといわれます。そのため母親、父親だけではなく、きょうだい、おじおば、祖父母などが子育てに関わってきました。子どもという自然に対してみんなで協力しながら関わってきたのです。そのあり方はまさに「農的」ではないでしょうか。

ちなみに自主保育は、自分の子であろうとなかろうと、みんなでわいわいがやがやしながら育てようとする「ゆるやかさ」と「濃い人間関係」のある営みです。このシンポジウムには、なんとなくアナーキーな匂いのするタイトルに惹かれて参加したのですが、この日をきっかけに、私は「農」と子育てを結びつけて考えるようになりました。

ここでいう「農」とは単純に農業という業種や[13]、自然志向の生活だけを指すものではなく、私たちの暮らしの足元を見つめ直す意味でも使っています。そもそも、農業とは、その地域の自然体形を上手く利用していく営み[14]のことです。その実現のために人間同士の助け合う関係がありました（たとえば結などの協同労働）。そのような人間関係を支えるために、暮らしの場である家は、生活の場であり、仕事場にもなり、近所の人が来れば接客の場になっていたのです。人びとが互いに助け合いながら自然と付き合っていくところに、農という営みの本質があるのではないかと思います。

現代の子育ちや子育てをめぐるさまざまな課題の根本のひとつは、子育ちや子育てが「自然」や「地域」から離れてしまったことにあるのではないかと考えます。そして、本書で取り上げる自主保育、青空保育、森のようちえん、冒険遊び場には、「子ども」「自然」「農」という3つのキーワードを実現し、現代の子育ちや子育てをめぐる課題を解決するためのヒントがある

13 むしろ効率を重視する大規模農業は「農的」ではないと思います。

14『農の営みから』内山節（農文協）36頁

写真序－2　田んぼで作業

のではないかと思うのです。

## ひととしての根っこが育つ乳幼児期

最後に、本書では「子ども」をテーマにする時、主に就学前の子どもの育ち・育てに注目して述べていることをお伝えします。乳幼児期はひととしての根っこが育つ大事な時期です。根っことして育てたいのは、「わたしが好き」（自己肯定感）と「わたしは○○が好き」（のちの知的好奇心につながるもの）という感覚です。その育ちは、目に見えるものとしては表れにくいものですが、しっかりと根っこが張っていれば、ちょっとやそっとのことでは倒れない幹が育ちますし、たとえ倒れてもまた芽が生えてきます。自己肯定感は「○○ができる（できない）から」という条件付きではなく、自分の存在をまるごと受け止めてもらうことで育まれるもの。またしっかり遊びこむことでも「わたしが好き」「○○が好き」という感覚が育ちます。本書で取り上げる実践は、この根っこを育てる土のようなものです。そこで、発達心理学の視点も織り交ぜて、コミュニティに重要な要素である「子ども」が育つこと、またその「子ども」を育てることについて論考していきたいと思います。

## 本書での「自然」のとらえかた

●自然の意味を調べると、「人為が加わらない」ということが含まれる定義を目にします。環境社会学者の宮内泰介さんは、自然について考える際、人間と切り離された形で自然を考えるのではなく、自然と人間の関係はどうだったかをふまえる必要がある*と指摘。その例として、里山など日本列島の多様な植生が人間活動とのかかわりで成り立っていることが挙げられます。

●「自然」が「nature」の意味で使われるようになったのは、明治の終わりになってからだそうです。それまで、自然はジネンと読まれるのが一般的で、「おのずからそうなっている」とか「あるがまま」という意味で使われていました。それが「nature」の訳語となったのは、日本人にとって山川草木はおのずからそこにあるものとしてとらえられていたからではないでしょうか。

●本書では天体、山川海草木、動物など人間社会を取り巻く環境としての「シゼン」と、人間を含んだこの世にあるものを創り出した大きな働き、人間の意志によって防ぐことのできないものごとの成り行き「ジネン」の双方を含むものとして「自然」をとらえます。

*『歩く、見る、聞く　人びとの自然再生』宮内泰介（岩波新書）64頁

《理論編》1章

# 子育てはひとりではできない

菅野幸恵

アウェイ育児とは
コペルニクス的転回
子育てのつらさはどこから
子育て支援の主役はだれ？
子育ての私事化
ワンオペとイクメン

# アウェイ育児とは

神奈川県川崎市の外遊びグループに参加している方たちを対象にお話をしたときのこと。ふと思い立って、その場にいた20名弱のお母さんたちに「この中で川崎が地元の方はいらっしゃいますか」と尋ねてみたところ、手を挙げた方はゼロ。全員が別の地域で生まれ育った方でした。そんな生まれ育った地域以外での子育てを「アウェイ育児」と名付け、地域でのつながりを十分に持てず孤立した子育てに悩む親の存在を指摘したのは、NPO法人子育てひろば全国連絡協議会が行った調査[1]です。地域子育て支援拠点[2]を利用している母親1、175人の回答をまとめたこの調査では、「自分の育った市区町村以外で子育てする母親」は7割超え。近所で子どもを預かってくれる人はいるかという問いには、自分の育った市区町村（ホーム）で子育てしている母親の7割近くが「いる」と答えているのに対して、自分の育った市区町村以外（アウェイ）で子育てをしている母親は「いない」が7割と対照的な回答でした〈図1―1、図1―2〉。

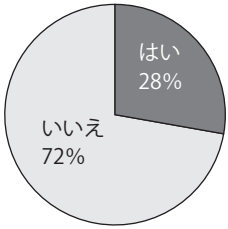



図1－1　あなたが育った市区町村で、現在育児をしていますか？（出典：NPO法人子育て広場全国連絡協議会『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』）

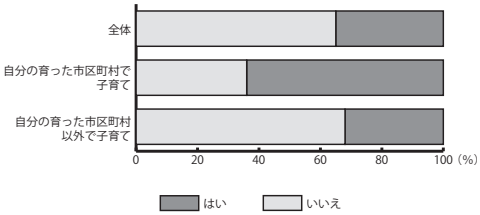



図1－2　近所で子どもを預かってくれる人はいますか？（出典：NPO法人子育て広場全国連絡協議会『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』）

1『地域子育て支援事業に関するアンケート調査2015』NPO法人子育て広場全国連絡協議会

2 ①子育て中の親子の交流の場の提供と交流の促進②子育て等に関する相談、援助の実施③地域の子育て関連情報の提供④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施。令和3年度は7、856か所で実施されています。親子と地域を結びつける架け橋のような存在として機能することが期待されている場所です。

この「アウェイ育児」は最近の現象ではありません。戦後、農的暮らしから都市的生活への移行を遂げていくなかで、日本の家族のありようは大きく変わりました。第一次産業が中心の頃は、自宅と職場である田畑は近い距離にあり、多世代が同居・近居する大家族が大半だったのです。しかし、その後多くの人が都市に移動し、サラリーマンとして働くようになったことで、郊外の自宅から都心の職場に通うようになり、核家族が増えていきます。それまで、自分の生まれ育ったホームで、地縁、血縁を中心に行われていた子育ては、見ず知らずの人ばかりのアウェイで行われるようになりました。

地縁、血縁を中心としたコミュニティにおける子育てには、子どもからお年寄りまでさまざまな世代の人が参加します。年長の子どもは年少の子どもの面倒をみたり、遊んだりすることによって子育ての周辺的な仕事を担っていました。青年期になると子育てに関わる言い伝えやタブーに触れるなど、責任の重い世話も担うようになり、その先に自分が親になるプロセスがあったのです〈図1―3〉。都市的な生活に移行していくなかで、少産少子化が進むと、自分の子どもをもつまで新生児を抱くどころか見たこともない状態で、親という責任の重い役割を担う人が増えます。もちろん、両親学級等で新生児大の人形を使って沐浴の練習をしたり、親になる心構えや子どもについての知識をレクチャーされたりする機会はありますが、首の座っていない赤ちゃんの抱きにくさや、新生児特有の泣き声に触れる経験がないまま親になることは、困難をもたらすでしょう。

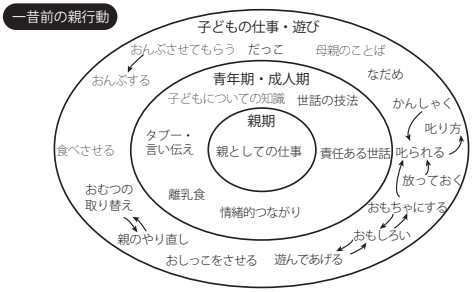



図1－3　ひと昔前の親行動（出典：氏家達夫「親業見習い中」『発達』73　ミネルヴァ書房　53頁）

## コペルニクス的転回

「子供ができた瞬間、それまでの自我や世界観はバリバリと音を立ててひび割れを起こし、〈私〉はいったんスクラップされてリビルドされる」[3]探検家の角幡唯介（かくはたゆうすけ）さんが、第一子誕生の際に感じたことを言葉にした一節です。また、育てられる者から育てる者になっていくプロセスは〈コペルニクス的転回〉と言っても過言ではないほどの生き方の一大転換だ[4]という指摘も。地縁・血縁を中心としたコミュニティのなかで子育てが行われていた時代、前述したように育てられる者から育てる者への移行は、比較的ゆるやかになされていたはずです。角幡さんが感じた大転換は、都市化が進んだ結果もたらされたものであると言えるでしょう。都市的生活は便利さや効率が重視されます。子育てとは、効率とは正反対の営みです。便利で効率的な生活を享受したひとたちにとって、親になることは、それまでの生き方を１８０度変えるようなものかもしれません。

## 子育てのつらさはどこから

日本では、１９７０年代に「母子心中[5]」という社会現象を通して、子育て中の母親が抱える困難、負担、不安が注目を浴びるようになります。母子心中は大正や昭和初期にも見られましたが、当時の心中は貧困が主な原因でした。一方、70年代に頻発した心中の原因は育児に閉

3『探検家とペネロペちゃん』角幡唯介（幻冬舎文庫）53頁

4『育てる者から育てられる者へ』鯨岡峻（日本放送教会）39頁

5 心中の本来の意味は、この世で添い遂げられない2人があの世で一緒になろうと一緒に死を選ぶことです。その意味で親子心中は本来の心中ではなく、子どもの殺人＋親の自殺なのですが、日本では親子心中という扱われ方をします。

塞し、精神が不安定になる育児ノイローゼにあるとされ、今までとは違うタイプの心中であることが注目されたのです。当時はコインロッカーベイビー事件[6]などをきっかけに、母性の喪失が嘆かれた時代。そこで「育児もできないなんて母親失格」という侮蔑的な意味合いを込めて、育児ノイローゼという言葉が使われました。そのため、母親たちの閉塞感というものは、母親の育児に対する理解が不十分であったり、母親が人間的に未熟だったりすることで生じる、母親個人の資質の問題として片付けられていました[7]。

1980年代になると、ようやく多くの母親が不安や不満を抱えていることが指摘されます。育児不安の背景には、夫の育児不参加や、家族以外のサポートの少なさなどの要因がある。母親たちの感じる閉塞感は、個人の問題ではなく、社会的な問題であると考えられるようになったのです。

それに呼応するように、今でいう「子育て支援」の芽がまずは地域で生まれます。東京都江東区にある神愛(しんあい)保育園では、電話相談を通して地域で孤独に子育てしている母親の存在に気づき、母親たちが集う場所として園の一部を開放しました[8]。1993年のことです。神愛保育園のように地域で始まった子育て支援は、孤立した子育てに悩む母親の声を子育て現場の人たちがキャッチして始まったものです。対照的に、国の施策としての子育て支援は、少子化対策としてはじまりました。1994年に策定された「エンゼルプラン」は、主に出生率の低下を食い止めることを目的とした子育て支援策です。その後、1999年により幅広い支援を盛り込んだ「新エンゼルプラン」が実施されましたが、少子化の歯止めにはならず、2004年に「子ども・子育て応援プラン」が策定。このプランによって、地域子育て支援センターの設置

6 鉄道駅などに設置されているコインロッカーに新生児が遺棄される事件。日本では1973年前後に相次ぎました。

7 『あたりまえの親子関係に気づくエピソード65』菅野幸恵（新曜社）20―22頁

8 「保育園で井戸端会議を」中林節子『発達』72（ミネルヴァ書房）38―42頁

など地域における子育て支援体制が強化されるようになりました。

## 子育て支援の主役はだれ？

子育て支援というしくみは、支援する側とされる側という関係を作り出します。つまり、親などの養育者を支援が必要な「困っている人」と位置づけることにつながるのです。このようなサービスを提供する人と受ける人がいる図式は、養育者を受け身にしてしまうと指摘されています[9]。また、養育者側も「サービスしてもらうのが当然」という態度になり、子育て支援の充実とともに、自主的な活動が弱体化するという皮肉な状況も生み出しかねません。本来の子育て支援は、主体的に子育てするひとをサポートするものであるはずです[10]。もし育てる側の「私が考える」という姿勢を奪っているとしたら、本末転倒な話になってしまいます。

## 子育ての私事化

ヒトの子育ての特徴は、母親だけではなく血縁・非血縁の仲間とともに行うところにあると言われます[11]。しかし、アウェイ育児は、〝群れ〟で行われていた子育てを養育者だけで行う状況です。それは、今まで地域の人々によって担われていた子育ての責任が、養育者だけに丸投げされる事態にもつながります。かつては子どもが何か「いけないこと」をしていれば、親ではなくても「ダメでしょ」と声をかけるのが自然で、親は何をしているんだと非難されるこ

9 「子育て支援による母親の心理的変化―母親を主体にした援助の検証」尾崎康子『家庭教育研究所紀要』25巻38―50頁

10 その点でニュージーランドで生まれた子育て支援「プレイセンター」は親の主体性を尊重する試みで興味深いです。

11 「生態学からみる結婚と子育てと家族 ―共同繁殖で育まれる「共感する心」と「子育ての幸せ感」―」長谷川真理子『政策オピニオン』NO-03（一般社団法人平和政策研究所）

とはありませんでした。というのも、子どもの迷惑は、お互い様のこととして受容されていた[12]からです。一方で現在は、子どもが何か「いけないこと」をすると、親の責任だけが問われます。子育ては社会（公）ではなく、家族（私）の役割になるのです。混雑した電車で子どもが泣いて泣き止まないとき、車内には冷たい空気が流れます。その空気を感じて小さくなる親の姿を見ると、いたたまれなくなります。そんなプレッシャーがあると、「誰にも迷惑をかけないようにと我が子を見張る」という子育てをしてしまいかねません。

NPO法人フリースペースたまりばの理事長である西野博之さんは、現代の子育ての問題は「過干渉[13]」と「ネグレクト」だと指摘[14]しています。自分の責任を追及されるのを恐れるあまりに過干渉になってしまう親と、自分の子どもなんだから自分の好きにしていいという親の両極端な状態が見られるのです。後者は、子どもがいけないことをしていても注意しないのは私の勝手だし、他の人にとやかくいわれたくないという心情から生まれるようです。これらの両極端な親の背景には、子育てが親だけに任されたことの負の側面が共通してあると思います。

近年では、「子どもの商品化」[15]という今の子育ての問題を指摘するセンセーショナルなことばも登場しました。子どもに手やお金をかけ、「私の作品」として世に出そうとしている親の姿を指していますが、それも私事化の表れと言えるでしょう。

あふれる情報のなかで、どうすればいいかわからなくなることもあるでしょう。いわゆる〝モンスターペアレント〟も、私事化が生み出した現代の問題です。モンスターペアレントと呼ばれる人たちは、孤立して社会とどうかかわっていけばいいか、苦しみもがいている人たちではないか[16]という指摘も。孤立した結果、自分の価値と社会の価値が切り離され、自分の価

12「子ども観の再生産のプロセスと子どもの居場所」柳父立一『子ども・若者と社会教育』日本社会教育学会編（東洋館出版社）101頁

13 過干渉とは、子どもは望んでいないことをやらせすぎることです。親が望んでいることをさせたり、子どもが自分でする気持ちになる前に、やらせてしまうなど、大人が子どもをコントロールすることです。一方過保護は子どもが望むことを叶えることとして区別します。

14 青山学院女子短期大学の授業（「いのちとケアの人間学」）にて。2018年11月12日。

15『やりすぎ教育』武田信子（ポプラ社）41頁

16「悪い子」とはどのような子どものことか」麻生武『発達』127（ミネルヴァ書房）8頁

値観を社会のほうに押し付けるという事態になっているのではないでしょうか。

## ワンオペとイクメン

アウェイ育児と並んで現在の育児を表現する「ワンオペ」というワード。「ワンオペレーション」の略で、1人の従業員がすべての業務を担うことを意味します。もともとはファストフード店やコンビニエンスストアでの過酷な労働状況を指していましたが、育児についても使われるようになりました。ワンオペとは、夫婦のどちらか一方がひとりで子どもの世話を引き受けている状態を指します。どちらが担っているのか、図1―4を見てみましょう。6歳未満の子どものいる夫婦の家事育児時間を示したものです。圧倒的に妻（母親）の時間が長いことがわかります。国際的に見ても、日本の男性の家事育児時間の少なさが目立ちます。共働きかどうかによって違うのではないか？と思われるかもしれませんが、残念ながら、妻が有業でもこの状況は変わりません〈図1―5〉。

ワンオペもアウェイ育児同様、最近の現象ではなく、都市的生活への変化のなかで生まれたものです。高度経済成長に伴う経済力の向上は賃金の上昇をもたらし、夫の給与だけで家族が暮らせるようになったことによって、女性は結婚や出産を機に退職し、いわゆる専業主婦が一般的となりました。家庭に入った女性は、主に重工業が職場であった男性を支える役割を期待され、男性は長時間労働と住居の郊外化に伴う通

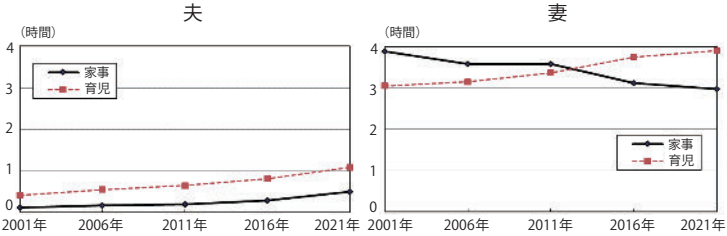



図1―4　6歳未満の子どもを持つ夫・妻の家事時間及び育児時間の推移（2001年～2021年）
（出典：令和3年社会生活基本調査（総務省統計局）
～https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/pdf/gaiyoua.pdf）

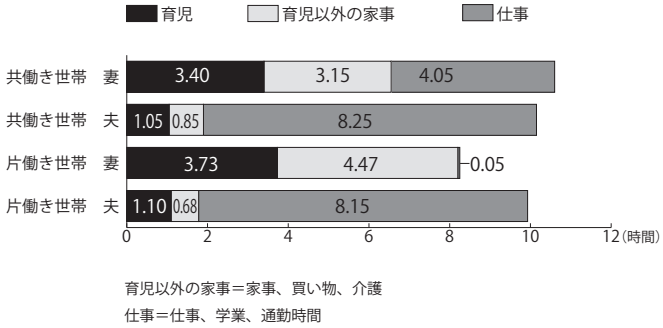



図１－５　６歳未満の子供をもつ夫婦の育児・家事関連時間（共働きか否か）
（出典：令和３年社会生活基本調査（総務省統計局））

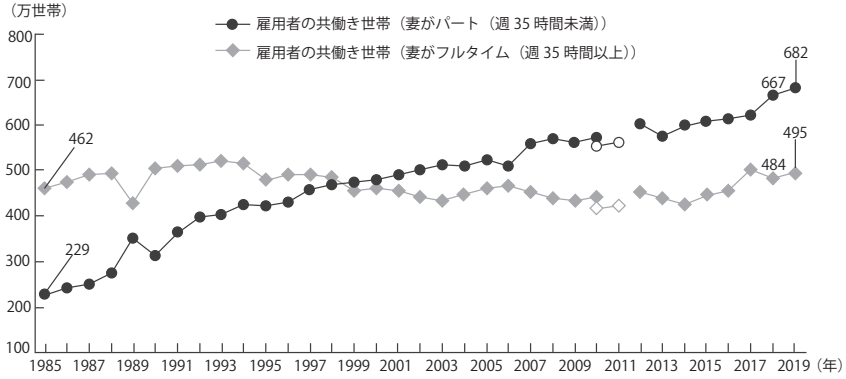



図１－６　妻の就業時間別共働き世帯数の推移
（出典：男女共同参画白書 令和２年版~https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r02/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-12.htm）

勤時間の増加により家庭にいる時間が減少、女性に子育ての負担が偏るようになります。ただ、働く男性と無職の妻からなる専業主婦世帯が多かったのは１９８０年代で、１９９０年代後半には共働き世帯の数が逆転。共働きといっても、妻がフルタイムで働いている世帯の割合は横ばいで、パートタイムで働く妻が増えています〈図１―６〉。妻が働きに出たからといって男女の役割に変わりはなく、女性は仕事と家事育児を担ってきました。

イクメンもこの状況から生まれたものです。イクメンとは「子育てする男性」の意味で、厚生労働省の「イクメンプロジェクト」が始まった２０１０年ころから広く使われるようになりました。この言葉の存在自体が、男性が育児に不参加であった、もしくは現在も参加していないことを示しています。２０２０年の男性の育児休業の取得率は12・65％。はじめて10％を超えましたが、女性の81・６％に比べるとまだまだ少ないと言わざるを得ません。休業期間を見てみると、女性は約９割が６か月以上取得しているのに対して、男性の約８割は１か月未満で、うち半数は５日未満。取らないよりはマシですが、取得率だけ上がればいいものでもなさそうです。男性の家事育児時間が増えない背景のひとつに、育児期の男性の労働時間の長さがあります。ベネッセ教育総合研究所が行った調査[17]では、乳幼児をもつ父親の約４割が21時以降に帰宅している実態が明らかになりました。さらに、20時以前に帰宅する父親と、21時以降に帰宅する父親の育児行動を比較してみると、「寝かしつけ」「お風呂に入る」「遊ぶ」「叱ったりほめたりする」といった日常的なかかわりに大きな差がみられました。働き方を見直すことがまず必要です。

17 『乳幼児の父親についての調査』ベネッセ教育総合研究所 ２０１４年

《理論編》2章

# 地域に遊び場がなくなった

菅野幸恵

外遊びをしなくなった!?
遊び場はどう変わったか
遊び環境の変化が、遊びの意欲を低下させる
「お客様」になった子ども
社会がアソビを失った
多大化が生み出す安心安全の過剰、管理
子どもや社会への信頼の喪失

子どもの危うさを許容できなくなった地域
子どものこころとからだに起こっている変化
危機的状況だからこそ遊びの機会を

# 外遊びをしなくなった!?

みなさんは子どものころ、どこで、だれと、どんな遊びをしていましたか。

２０２１年に行われた調査[1]では、週のうちどのくらい外遊びをしていたかを尋ねました。回想ではありますが、年齢が上がるほど頻繁に外遊びをしていたことがわかります〈図２―１〉。また遊ぶ場所については、年齢が高いほど原っぱや川・池などの自然の場所が多いのに比べ、年齢が低い世代では公園や友だちの家が多いです。授業のなかで、似たようなことを学生に尋ねると、小学校に上がる前に遊んでいた場所として挙げられるのは、公園と家が突出して高くなります。誰と遊んでいたのかを尋ねると、同年齢の友だちという回答が最も多く、ついできようだいです。

子どもたちの遊びに変化が生じていることが指摘されるようになったのは、都市化が進行した１９６０年代ころからでした。よく言われるのが三間の喪失。三間とは「空間」「時間」「仲間」のことです。遊びに必要な３つの間が失われているのではないかというのです。

外遊びの時間が減った分、子どもたちは何をしているのでしょうか。別の調査[2]では、年齢が上がるほど外遊びの時間が減少。３歳児の３割程度が、平日幼稚園や保育園以外で外遊びをしないことが報告されています。その代

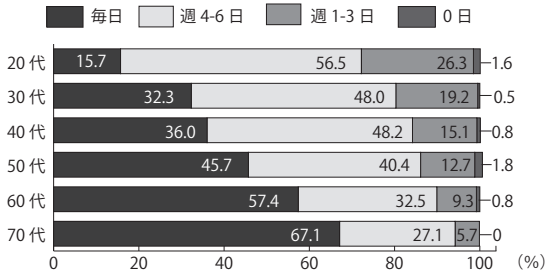



図２－１　週のうちどのくらい外遊びをしていたか
（出典：『子ども時代の遊びと地域との関わりに関する調査』2021年～https://sites.google.com/view/cosodachi/%E8%AA%BF%E6%9F%BBsurvey?authuser=0）

1 木下勇が中心となって２０２１年３月～６月にかけて『子ども時代の遊びと地域の関わりに関する調査』がオンラインにて行われた。回答者は18歳から70代までの２、２８７人。https://sites.google.com/view/cosodachi/%E8%AA%BF%E6%9F%BBsurvey?authuser=0

わりに増えているのが、テレビやＤＶＤの視聴時間で、１歳児から１時間以上という回答が多くなります。スマートフォンの使用率については、１歳児でも30分以上の使用が１割超〈図２―２～図２―４〉。さらに、ある調査[3]では、４歳以降で習い事をしている子どもの数が多くなり、５、６歳になると約７割の子どもが習い事をしていることが明らかになりました。０歳代から習い事を始めるなど低年齢化も進んでいるようです。

## 遊び場はどう変わったか

先行研究[4]を参考に、戦後の子どもの遊びがどのように変化したのかを表２―１にまとめました。第１の変化は都市化が進んだ高度経済成長期と重なります。第２の変化は、１９８０年ころからです。第１の変化は主に数量的なものであり、第２の変化は質的な変化が大きい[5]と指摘されています。第３の変化はバブル経済崩壊以降です[6]。

高度経済成長期以前から、子どもの遊び場は原っぱ（空き地）や道路でした。原っぱや道路は子どもたちにとってたまり場であり、ガキ大将を中心とした異年齢の集団が、かくれんぼや鬼ごっこ、缶けり、ボール遊び、などに興じていたのです[7]。仲間集団での遊びのなかで、子どもは大人になるために必要な社会的能力を身につけていました。その集団は子ども同士という対等な関係をもちながら年長者と年少者という上下関係も含むものでした。こうして、年長の子どもから年少の子どもへ遊び文化が継承されていったのです。また小さい子どもは「みそっかす[8]」と呼ばれ、鬼ごっこで鬼を免除されるなど特別な配慮を受けていました。第１の変化

2 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）とベネッセ教育総合研究所が行った２０１６年から行われている縦断研究。２０１６年度に生まれた子どもを持つ保護者を対象に年１回調査を実施。全国の３、２０５世帯が参加（初年度）。

3 ベネッセ教育総合研究所『第５回幼児の生活アンケート』２０１６年

4 『子どもとあそび』仙田満（岩波書店）『子どもを育む環境 蝕む環境』仙田満（朝日新聞出版）『子どもの居場所と多世代交流空間』中井孝章（大阪公立大学共同出版会）

5 『子どもとあそび』１７５頁

6 第４の変化があるとしたらコロナ後が考えられますが、実際どのような影響があるのかはもう少し時間をおいてでないと考察できないと思います。

7 『子どもの居場所と多世代交流空間』中井孝章（大阪公立大学共同出版会）11頁

8 地域によって言い方が異なり

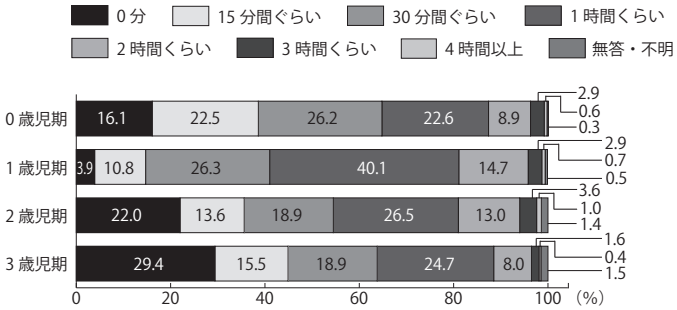



図２－２　幼児の外遊び時間
（出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所　共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年）

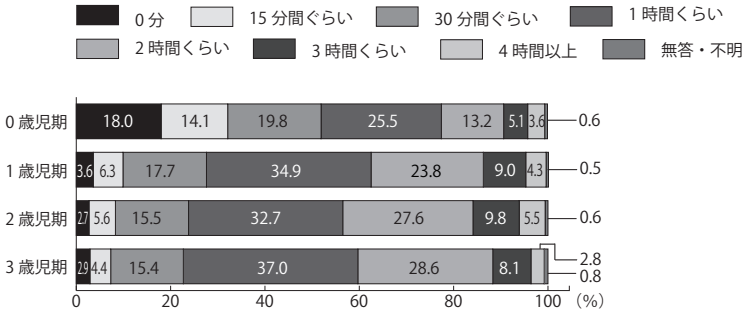



図２－３　幼児のテレビDVD視聴時間
（出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所　共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年）

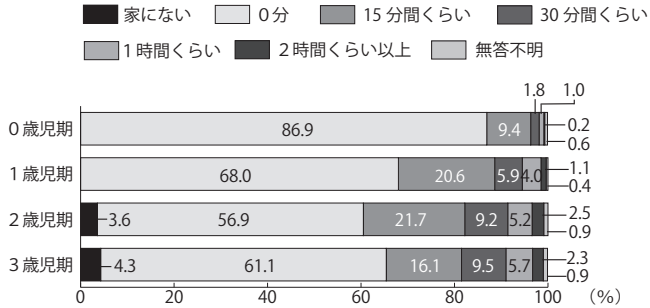



図２－４　幼児のスマートフォン使用時間
（出典：東京大学Cedep・ベネッセ教育総合研究所　共同研究『乳幼児の生活と育ちに関する調査』2017-2020年）

では、このような場が、まず縮小していきます。

１９８０年代になると、質的な変化がおきます。原っぱや道路から子どもたちは追いやられ、家のなかでテレビを観たり、ゲームをしたりすることが多くなりました。作家の赤坂真理さん[9]は、「高度経済成長期とは、人が私有を追求するために共有をなくしていった過程」であったと言います。子どもに即して言えば、遊び場を失った一方で、多くの子どもが個室を持ち、自分専用のゲームをもつようになった時代であると言えるでしょう。さらに赤坂さんは過渡期を象徴する漫画として『ドラえもん』[10]を取り上げ、ジャイアンは、ガキ大将になりたくてもなれなかった男の子だと指摘します。ガキ大将が存在していた時代、子どもたちは原っぱや道路で自由に遊ぶことができました。ガキ大将の役割は、遊びの現場を取り仕切ること。異年齢集団の仲間関係を調整したり、時には別の集団との交渉（ケンカ）を行ったりなどです。『ドラえもん』にも空き地が登場しますが、そこに集まる仲間は、みな同年齢で、敵対する集団もありません[11]。共通の目的と、それを実現する場所がなくなると、ガキ大将の存在意義が失われていきます[12]。そこにジャイアンがガキ大将になれなかった理由があるのではないでしょうか。

１９９０年代以降の第３の変化として押さえておくべきことは、インターネットの普及です。ゲームもオンライン化し、子どもの遊び場が現実世界から、仮想空間に移っていきました。もうひとつは、リーマンショック以降に始まり、コロナ禍で顕在化した、経済格差の問題です。日本の子どもの貧困率は１９８０年代から上昇し、ＯＥＣＤ加盟国のなかでも最悪の水準にあり、厚生労働省の調査[13]では、13・５％の子どもが相対的貧困[14]状態にあると明らかになっています。７人に１人が貧困状態にあるのです。経済格差が子どもの遊びに与える影響は否定できません。

ます。ごまめ、おみそなど配慮というと聞こえはいいですが、年少の子どもがいてもおもしろく遊ぶために子どもたちが編み出したしくみというほうが適切かもしれません。ただ小さい子も同じ場を共有していたことは重要です。

9『愛と暴力の戦後とその後』赤坂真理（講談社）98頁

10 １９６９年連載開始

11 興味深いことに、映画版ドラえもんのジャイアンはガキ大将的ふるまいをして、ときにそれがみんなをまとめたり、解決につながる力となります。それはみんなで成し遂げる共通の目的があるからではないかと思います。漫画やアニメでは、そのような目的がないため、ガキ大将的なふるまいをしても傍若無人に映ってしまいます。

12 赤坂さんは『ドラえもん』に登場する象徴的な場所として、土管のある空き地とのび太の勉強部屋を挙げます。共有と私有の両方を描いたことに過渡期を象徴する理由があります。

表２－１　遊びの変化

| | 第１の変化<br>1960-70 | 第２の変化<br>1980-1990 | 第３の変化<br>1990年 - |
|---|---|---|---|
| あそび空間 | 縮小。1955年ごろにくらべ75年ころには都市部で1/20，郊外部で1/10。<br>道が遊び場でなくなる | 1975年に比べて1/2。小さく機能分化している。<br>公園が唯一の遊び空間に | さらに減少<br>子どもへの犯罪報道により、公園の利用率が低下<br>遊び場の管理化が進む |
| あそび時間 | 縮小化。1965年ころに内あそび時間が外あそび時間より長くなった（それまでは外あそび時間＞内あそび） | 内あそびが外あそび時間の４倍に（1990年）<br>あそび時間の分断化 | 内あそびと外あそび時間の差がさらに増大 |
| あそび方法 | テレビの影響大<br>＊1953年テレビ放映開始<br>1965年90％の家庭にテレビ | ファミコン・テレビゲームの影響大<br>＊1983年ファミリーコンピューター（ファミコン）発売 | スマートフォン、インターネットの影響大 |
| 子ども部屋 | 個室化が進行 | 完全個室化 | 完全個室化 |
| 子どもの数 | 少子化傾向はそれほど顕著ではない | 少子化が進行<br>都市部での児童数は1975年ころの1/2 | 少子化がさらに進行（合計特殊出生率は2005年に過去最低の1.25を記録した後、上昇傾向だったが、再び低下傾向） |
| 親の世代 | 戦中・戦後世代 | 戦無世代 | 戦無世代 |
| 都市と田園 | 子どものあそび環境の悪化は、まだ都市部だけで、田舎では昔ながらのあそびがあった | 子どものあそび環境の変化が地方小都市、田園地域までおよび、田舎の方が都市部よりも遊び環境が貧しくなった | 左記の傾向が続く |
| 経済 | 高度成長期 | 安定～バブル経済 | バブル崩壊～リーマンショック・・によって格差拡大 |
| 住宅 | 和式の住宅が多い | 洋式化 | 洋式化定着 |
| あそび集団 | ガキ大将集団から同学年同年齢集団に移行 | 集団の縮小、同学年同年齢化 | 同学年同年齢集団も解体へ |

（出典：仙田満『子どもとあそび』（岩波書店）ｐ174の表をベースに、第３の変化を加筆）

## 遊び環境の変化が、遊びの意欲を低下させる

遊び環境の変化は、子どもにどのようなことをもたらすのでしょうか。建築家の立場から子どもの遊び環境の研究を続けている仙田満さんは、遊び環境の悪化の循環を図2―6に示しました。遊ぶ時間が減ると、複雑な遊びができなくなり、遊びの方法が単純化。熱中する機会が少なくなります。遊ぶ場所が少なくなると子どもが集まりにくくなり、遊びの集団が小さくなったり、なくなったりするのです。すると、年長の子どもから年少の子どもへ、遊び方を伝えることもできなくなります。この図で重要なのは、これらの結果、遊びの意欲が喪われるということです。

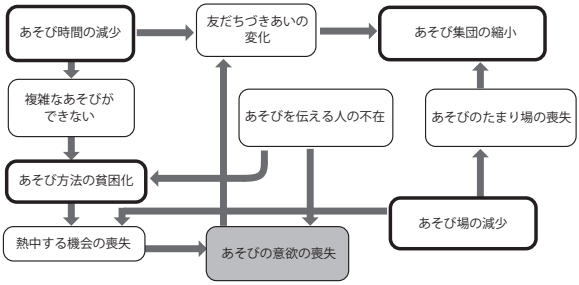



図2－5　あそび環境の悪化の循環
（出典：仙田満『子どもとあそび―環境建築家の眼―』（岩波書店）1992を改変）

## 「お客様」になった子ども

前出の浜田寿美男さんは、自身の子どものころの記憶は何より「働く」ことだった[15]と言います。1947年生まれの浜田さんの子ども時代は遊び環境が大きく変わる以前のこと。ただ

13 令和元年国民生活基礎調査

14 相対的貧困とは、その国や地域の水準の中で比較して、大多数よりも貧しい状態のことを指しています。厚生労働省の発表する相対的貧困率とは、世帯所得が全世帯の中央値の半分未満である人の比率を示しています。一方絶対的貧困とは、国・地域の生活レベルとは無関係に、生きるうえで必要最低限の生活水準が満たされていない状態を示します。

15 『心理学をめぐる私の時代史』浜田寿美男（ミネルヴァ書房）2頁

遊びと仕事の境目ははっきりせず、薪割の合間にコマや弓をつくるなど、与えられた仕事をこなしながら、暇をみつけては遊んでいたそうです。浜田さんが特別なわけではなく、第一次産業が中心だった時代、子どもは重要な働き手のひとりでした。浜田さんは自分が働くことで、家族から「助かる」と言われたことは嬉しいことだったと話しています。働くのはきついことなのだけれど、親の「助け」になることで、自信がついたと言うのです。

内山節さん[16]は、フランスの山村で暮らす子どもたちの様子を紹介しています。その山村の子どもたちは、小学校に上がるころになると、誰もが自分の仕事をもっています。最初は鶏の世話を任され、大きくなるともう少し難しい仕事を任されます。仕事が終わると、後は遊びの時間。自分の仕事について語るとき、子どもたちは誇らしげだったそうです。子どもたちの誇りには、自分が必要な人間であるという実感があるのだ、と内山さんは指摘します。家族、ひいてはそのコミュニティの役に立っているという感覚が、子どもたちに自信をもたらすのです。

浜田さんや内山さんの例から、かつては子どもが家庭や地域の暮らしの一部を担う生活者であったということがわかります。産業構造の変化によって、子どもは働かなくてもよくなりましたが、家族やコミュニティの助けになるという生活者としての実感をもつ機会はなくなりました。その代わりに、子どもはお客様として扱われるように[17]。お客様と言えば聞こえはいいものの、それは子どもが「家庭や地域の人間関係や仕事から完全に締め出された」[18]ことを示すのです。

16『子どもたちの時間』内山節（農文協）
17『情報・消費社会と子ども』高橋勝（明治図書）12頁
18 高橋同掲書12頁

# 社会がアソビを失った

三間の喪失に象徴される遊び環境をめぐる変化が確かだとしても、その時代に生まれた子どもにとってはそれが当たり前です。三間の喪失以外に遊びに影響を与えているものはなんでしょうか。NPO法人ハンズオン埼玉理事の西川正さん[19]は、遊びの本質を「想定外のドキドキ」であるとし、今の社会では想定外を許容する気持ちの余裕が失われている[20]と指摘しています。それを象徴するのが「何かあったら困るので」という言葉。何かとは、重大事故と苦情です。責任の所在や損得勘定を気にしてしまう人びとが増えたことによって、禁止と自粛が悪循環。結果として子どもたちの遊び環境の貧困化につながってしまうのです。

西川さんは、その背景に「制度化」と「サービス産業化」があると言います。サービス産業化とは、住民がお客様化してしまうことです。保育所の先生たちと話していて、保育をサービスと考える親が増えていると聞くようになったのは、20年前くらいからです。お金を出しているのだからこれくらいしてもらって当たり前、保育を保育料の対価のように考えているのです。西川さんはその現象を「保育所の託児所化」と呼んでいます。「託児」とは、子どもたちを無傷で安全にお預かりする（管理する）こと、一方「保育」とは、子どもたちの安全を守りつつ、失敗やトラブルを糧にして子どもたちがやりたいことを実現していくプロセスをサポートしていくことです。ある保育所の園長は、毎朝子どもを預かるときに、傷があるかどうかチェックすると言っていました。それを聞いて私は、子どもはレンタカーではないのだからと、クラク

19（1967―）コミュニティワーカー、NPO法人ハンズオン埼玉理事。まちづくりや市民運動の支援に関わる。

20『あそびの生まれる場所』西川正（ころから）9頁

ラしてしまいました。

ところが一方で、別の保育所の園長は、保護者から問題が指摘されたとき、それを「はい、わかりました」とは引き取らず、「一緒に考えましょう」と保護者を巻き込んでいくと話します。なぜなら引き取ってしまうと保育所の問題になってしまいますが、一緒に考えれば私たちの問題となるからです。この保育所のあり方は、西川さんの指摘する制度化とは違った方向を目指しているのではないでしょうか。しかし、年々多くの保育所が前者のあり方になってしまっています。責任を追及されることを恐れ、保育所側はことなかれ主義に陥り、意思決定に参画しない保護者は、課題解決の当事者であるという意識をもちにくく、両者の溝は深まるばかり。公園などの禁止事項が増えるのも、同じ構造だと西川さんは指摘します。ボール遊びのボールが近隣の住宅の窓にあたる→住民が役所に苦情を入れる→役所が禁止するという構図です。住民が行政の責任を問うと、責められていると感じる役所が表向きは対応しながら、「住民はどうしようもない」と不信感を示す。この応酬が自粛と禁止を生み出すのです。

## 多大化が生み出す安心安全の過剰、管理

原っぱや道路で子どもたちが自由に遊べていた時代、大人と子どもの間にはほどよい距離感があったと思います。完全にほったらかしというわけではなく、「見ぬふりして見る」[21]大人の姿がありました。しかし、現在はそうではありません。子どもの遊びの環境づくりの第一人者である天野秀昭さんは、少子化は子どもから見れば「多大化」、大人がやたらに多すぎる現象

写真２－１　禁止事項の看板

21『おせっかい教育論』鷲田清一ら（１４０Ｂ）１０２―１０５頁

である[22]と言います[23]。多すぎる大人は子どものことを放っておいてくれません。また、２０１０年代に待機児童が社会問題化し、解消のため都市部では保育所の設置が相次ぎました。その時に起こったのが、保育所設立への反対運動です。反対理由のひとつが「子どもの声がうるさい」というものでした。設立40年になる保育園では、最近になって近隣からの苦情によって、園庭で遊ぶ時間を短くせざるを得なくなったといいます。朝日新聞のＷＥＢ調査[24]によれば、「子どもの声や物音をめぐり、トラブルになったり、気まずい思いをしたりしたことはありますか」という問いに「はい」と答えた人は76％。多くの人がトラブルを経験していることがわかります。

さらに、２０００年以降は、子どもをターゲットにした犯罪[25]が続いたこともあって、子どもの安全への関心が高まりました。集団登下校や防犯ブザーの携帯、不審者情報の配信、監視カメラの設置などによって子どもたちの安全は強化。遊具で事故が起きると、似たような遊具はたちまち使用禁止になります。安心・安全という名のもとの管理と引き換えに、子どもたちの自由が奪われました。

## 子どもや社会への信頼の喪失

子どもを「見守る」と「見張る」という行為はどちらも子どもの安全を願ってのものですが、子どもを信頼しているか、社会を信頼しているかという点で違いがある[26]という指摘があります。子どもひとりでは対処できないと思うと「見張って」しまい、何かあったら自分が責めら

22『よみがえる子どもの輝く笑顔』天野秀昭（すばる舎）１００頁

23 ２０２２年４月段階で総人口に占める15歳未満の子どもの数は１、４６５万人（総人口に対する割合は11・７％）。

24 ２０１５年 https://www.asahi.com/msta/iken/14.html#minna

25 ２００１年大阪教育大付属池田小学校殺傷事件など。２０１０年以降子ども（13歳未満）が被害者となる犯罪は減少傾向にある。

26『ははがうまれる』宮地尚子（福音館書店）１００―１０１頁

れると思うから過干渉になるのです。

幼児期から小学校低学年くらいの子どもに関わる人と話していると、「許可待ち」「指示待ち」する子どもが増えているとよく語られます。許可待ちとは「○○していいですか」と尋ねる行動で、指示待ちとは、大人がどうしたらいいか教えてくれるのを待っている行動です。こうした子どもの背景には、ここで指摘された大人の態度が関わっているのが容易に想像できます。

## 子どもの危うさを許容できなくなった地域

天野さんは子どもの遊びは「AKU」だと言います[27]。AKUとは、A＝危ない、K＝汚い、U＝うるさいの頭文字をとったものです。遊びには危険がつきもの。大人の目が届かない場所や、スリルのある遊びに惹かれます。汚れることを厭わないので、平気でどろんこになれます。汚れることよりもおもしろそう、やってみたいという気持ちが先なのです。感情や発声のコントロールは難しいので、感じたことそのままに声を出します。天野さんが伝える「AKU」の根っこには、実は子どもへの深い愛があるのですが、今の大人には「悪」（よくないこと）に思えてしまうのかもしれません。社会教育が専門の柳父立一（やなぶりゅういち）さんは「子どもは危ないことをする存在である」という子ども観が地域のなかで共有されていた時代は、大人の目の行き届かない子どもの世界があり、そこで子どもたちは教わることのできない生きる力の基礎を育んでいた[28]、と話します。大人の目が行き届き過ぎている今は、子どもたちにどうやって生きる力を育めばいいのでしょう。

27『よみがえる子どもの輝く笑顔』天野秀昭（すばる舎）31頁

28 柳父　前掲書110頁

写真２－２　どろのなかを泳ぐ

写真２－３　こんな高さだって！

## 子どものこころとからだに起こっている変化

子どもの遊び環境に変化が起こったことと並行して、子どものこころとからだにも「異変」が生じています。科学的な観点から子どものからだに関する研究を続けている野井真吾さんによると、戦後の日本において子どものからだのおかしさが指摘されはじめたのは、１９６０年ころだそうです。たとえば、遠足で最後まで歩けない子どもの存在が指摘され、その原因として体力の低下や、子どもの気持ちの問題などが議論されました。１９７０年代には、からだのおかしさが一部の専門家だけではなく、多くの国民に共有されるようになります。子どものからだの実態調査に基づいて製作されたＮＨＫ特集「警告!!子どものからだは蝕まれている！」[29]は、大きな反響をもたらしました。１９８０年代になると、視力の低下や自律神経機能の問題が指摘され、からだのおかしさが多様化。１９９０年代には、それらに加え、前頭葉機能の不具合や、アレルギーといった問題が起きます[30]。また、学級崩壊、キレる、保健室登校、不登校、自殺といった行動特性の問題も顕在化。さらに、２０００年代は生き物としての人間にとって重要な睡眠、身体活動、体温調整という問題、具体的には睡眠不足、身体活動の低下、低体温傾向が現れます。これらのからだの不調を救う可能性があるものとして、野井さんは「遊び」に注目しているのです。

たとえば、前頭葉機能を調べた調査[31]では、近年に小学生にみられる特徴的なこととして、２つのタイプが挙げられました。ひとつは幼児に特徴的ないつも「そわそわ」「キョロキョロ」

29 １９７８年放映。
30 『子どもの〝からだと心〟クライシス』野井真吾（かもがわ出版）１２２―１３０頁
31 野井　前掲書３０―４０頁

しているタイプが、小学校以降もかなりの程度みられること。そしてもうひとつは、おとなしくて「よい子」とみられがちですが、自分の気持ちを上手に表現できないタイプが一定程度見られることです。野井さんは、幼稚園や小学校で取り入れられている自由な遊び活動が、前頭葉の発達を促している可能性があると指摘しています。興奮が必要な幼児期に、ドキドキワクワクできる活動をすることで、興奮を抑える機能が育ち、自分の気持ちを表現できるようになっていくというのです。逆に言うと、最近の子どもたちのからだの不調には、ドキドキワクワクする体験の少なさが関係していると考えられます。

教育学者の汐見稔幸さんは、「幼い頃に自分の情動からの行動基準で行動することが多ければ多いほど、自主性や自尊感情、そして好奇心などが育ちやすくなる」[32]といいます。逆に社会的な行動基準が早く子どもに入り込んでしまうと、それらが伸びにくくなってしまうそう。自主性や自尊感情、好奇心は、小学校以降の学びに必要不可欠なもの。「何かあったら困るので」と子どもの行動を制限してしまうと、それらが育たなくなってしまう可能性があります。むしろ「おもしろそう」「やってみたい」という自らの感情に基づいて「遊ぶ」ことが、子どものこころとからだの育ちには必要なのです。

## 危機的状況だからこそ遊びの機会を

２０２０年に始まった新型コロナウイルスの感染拡大は、子どもたちの生活にも大きな影響を与えました。日本に第一波が押し寄せ、最初の緊急事態宣言が出された２０２０年３―５月

32『本当は怖い小学一年生』汐見稔幸（ポプラ新書）47頁

は、全国の小中高、特別支援学校に休校要請が出されました。その間、公園の遊具が使用禁止になるなど、外遊びも制限されたのです〈写真2―4〉。ある調査[33]では、「コロナについての困りごと」はなにか、という質問（複数回答）に対し、小学校低学年児童の60％が「外で遊べないこと」と回答しています。ベネッセ教育総合研究所が行った調査[34]では、1歳から5歳の幼児がコロナ前に比べると友だちと外で遊ぶ時間が減り、テレビやスマートフォンを使うスクリーンタイムが増えていることがわかっています。その影響として、体力の低下や、就寝時間の遅れ、生活リズムの乱れなどが指摘されています。

次章で述べるように、遊びは子どもの育ちにとって欠かせない活動です。「遊びは子どもの主食です」これは、日本医師会と日本小児医会が共同で作成しているポスターに掲げられている言葉です。このような危機的状況だからこそ、遊ぶ機会を保証することが重要です。

図2－6　日本医師会・日本小児科医会ポスター

写真2－4
新型コロナウィルスの感染防止のために使用禁止になった都立公園の遊具（東京都杉並区）

33 国立成育医療研究センターが実施した。2020年4―5月に全国の7～17歳の子ども2,591人、0～17歳の子どもの保護者6,116人、計8,707人を対象に実施した。

34 2020年5月に全国の1歳から小学生を育てる母親2,266名を対象にして行われました。

# 8章

# 対談[i] ～民主主義が子どもを育てる～

菅野幸恵
土井三恵子

大切なことって〝面倒くさい〟
民主的に育っていない私たち
覚悟は徐々にできていく
子どもがまんなかだからこそ
代わりが利かないつながりができる
子どもたちの民主主義
自分の軸と調和していく力の両輪が育つ
グレーな出来事で身につく〝生きる原動力〟

ファシリテーター
野村夏子[ii]

## 大切なことって〝面倒くさい〟

土井：じつは私、自主保育やプレーパークからたくさん学んできた人間なんです。というのは、青空保育ぺんぺんぐさを作るきっかけが、北欧の成熟した民主主義社会の元での教育や、25年前はほとんど知られていなかったアメリカのサドベリーバレースクール（デモクラティックスクール）等の出会いだったんですが、当時の日本では似た実践がほんのわずかだったからです。「自由」を突き詰める姿勢に大きな衝撃を受けた私は、身近に存在していた自主保育やプレーパーク、フリースクール等が、誠実に試行錯誤しているなあと気づきました。「民主的な育ちの場」とは、たとえば子どもの自由と自律、子どもが個として尊重されて、自分の意見を持って話し合いを重ね、生活の主となるようなこととか、多様性を尊重するといった子ども観や教育観を大切にしている場のことです。だから、ぺんぺんぐさは、今回大人のコミュニティが話題となりましたが、はじめは「民主的な育ちの場＝子どもの民主主義」をやりたくて始めたんです。青空保育という昔懐かしい名称を使っていますが、民主的な教育観もかなりプラスされている、「森のようちえん」です。

だからこそ、保育中は「大人が先回りしてやってあげないでね」ってお母さんに話しています。まず子どもが自ら気づいて自分の口で発して、そこに大人が応じていくことを基本にしたいと思っているからです。こうして実際にお母さんたちと運営していて気がついたのは、母親たちの営みも民主的な関わりなんだってこと。プレーパークせたがやが発

行している『気がつけば40年近くも続いちゃってる、住民活動の組織運営。』に紹介されていたゆるふわ会議を読むと、子育ちや保育で大切にしているポイントともすごくリンクしていて、驚きとともにその面白さにハマっていきました。

『市民の日本語』（ひつじ書房）の著者である加藤哲夫さんが、あるインタビューの中で「日本は民主主義じゃない」っておっしゃっていました。代表が何かやってくれるという上意下達、武士の頃の時代がそのまま残っていると。民主主義といっても、その基本はそれほど難しいことではないんです。住民が選んだ代表者を通じて間接的に政治に参加する間接民主制や、住民に選ばれた代表者が議員となり、議会で話し合って政治を行う議会制民主主義が、日本社会で主流になっているから、民主主義が遠い存在になりがちです。本来はまず「民」がやりたいことを自身で自覚して口に出すことで、周囲が変わっていくことが民主主義の基本だと思うんです。ただ、民が主になって意見を出し合ってもやっぱり主張と主張が合わないことが多くて、話し合って折り合いをつけながら、お互いのハッピーを探っていく必要がある。あえて言うなら「足元の民主主義」ですね。

野村：お互いの意見がぶつかると、どうしても時間がかかりますね。以前にお2人が〝大切なことって面倒くさい〟とおっしゃっていた言葉が印象的でした。その過程って、多くの人が「やりたくない」って思うのかもしれないと。

菅野：はい。でも上の世代では、当たり前だったんですよね。加藤さんの本にあったのは、「日本では、どうしても『公共』が理解されにくかった」ということ。というのも、「昔、共同社会の時代は、社会の中でお互いに迷惑をかけないように交渉しながら、みんなが納得する形を見出してやってきたのに、いきなり『公共』が入ってきちゃったから」という話だったと思います。昔からの営みを、今の時代に合う形でやろうとしているのが、青空保育ぺんぺんぐさをはじ

め、本書で紹介した実践なのでないでしょうか。

土井：青空保育ぺんぺんぐさは、保育スタッフや運営スタッフが中心になって運営している「森のようちえん」です。晴れても、雨が降っても、風が吹いても基本野外活動で、外で集合して外で遊んで、外でお弁当を食べて、眠くなったら時には外で寝て、そして外でお迎え。最近は園舎のある森のようちえんも増えてきたんですけれど、たいていそんな感じで、長時間外にいます。そうすると自然という存在が、体験するところや遊びに行くところや、イベント型の自然体験ではなくて、日常の中にあるようになるんですよね。そこで過ごすことになると、四季折々の変化を感じながら、感性豊かに育っていく様子が見られます。あえて、かっちりとしたカリキュラムを持たずに、自然の偶発性を生かしながら臨機応変に対処したり、観察したり、時には助け合ったり。人工物が少ないので、友だちとのかかわりと言葉を頼りに、イメージを広げて遊んでいくという特徴があります。

また、子どもを預けっぱなしじゃもったいないので、お母さんたちを「お客様」にはしません。子育てを保育サービスに助けてもらうことで楽になるんじゃなくて「少しの手間をかけて仲間ができれば、子育てはこんなにうんと楽になるよ、楽しめるんだよ」ってことを提案する、逆転の発想でここまで来ました。自分たちで育て合い、育ち合い、預け合おう！っていうような自主保育は、私個人はとても好きです。ぺんぺんぐさは、そんな自主保育と、預かってもらえる幼稚園のちょうど中間点になります。塩梅が難しくて苦労することもありますが、このグレーの中に大人も子どもも育ち合える学びがいっぱいあって。自主保育ができるパワーがある人たちじゃなくても、手作り保育や手作り子育てを味わってもらえたら、社会はどんどん元気になると思うんです。

菅野：ぺんぺんぐさの卒会式の場で、卒会するお母さんたちが一言ずつ話すときに、みなさん「楽しいことばっかりじゃなかったけど、すごく良かった」って、涙を流しながら言ってました。〝大切なことは面倒くさい〟というのは、映画監督の宮崎駿さんの言葉ですが、卒会式でのお母さんの言葉はまさに〝面倒くさい〟を経験したから出てくる言葉なんですよね。自分の意見を言えって言われるし、大人同士はもちろん、子ども同士にもいろんな面倒くさいことが起こります。それを介入しないで、見ていなきゃいけないこともある。続けられるのかなと、葛藤もあったでしょう。それでも、最後の日に「良かった」という言葉が絞り出されてくる。

## 民主的に育っていない私たち

土井：みなさん「ひとりで子育てしないでね」ってキャッチフレーズを見てぺんぺんぐさに入ってくるから、お母さんは最初安心して、実家に帰ってドッと疲れが出たような状態になるんです。手作り保育の良さを感じているポテンシャルのある人たちなんだけど、入園した後は気が抜けちゃうんですよね。だから少しずつ、共同の子育てがあるんだっていうことを知ってもらい、リラックスして自分を取り戻していただいた後に、自ら発言したり考えたりして、だんだんと行動していくようになる。その過程の尊さを改めて感じます。自主保育との違いは「運営参加度の度合い」だけでなく、このことも大きな違いかな。まずは月1回のミーティングで、集団の中で自分を語るってところから出発します。ときには弱みを見せながら自分を理解して、他者を理解して、自己紹介をし合っていくことで、信頼関係ができていきます。これはスタッフもそうです。指名されないとね、やっぱりしゃべられない人が多いんで、自分から意見が言えるようになっていくところから、運営にかかわり行動し始めて、面白さに気がついていく、っていう感じかな。だから育ちの場をともに作る者たちとして、「意見を言おう」「考えよう」「違和感に気づいて言葉にしよう」ってことを繰り返

し伝えていきます。この当たり前の過程こそが、民が主になるための民主主義の第一歩なんじゃないかな。

菅野：土井さんから、民主主義ってワードが出てきたとき、「これだ！」と思って、すぐに対談のテーマにしようと思いました。やっぱり民主主義っていう言葉が入ると、この本で紹介している、マニアックですごく小さな活動たちが、もっと外に広くつながって、別の観点から見ることができると思ったんです。

野村：お母さんたちが「まず安心してから」って、すごく分かりますよ。私も子育て中はすごく不安だったし、ひとりでやるものじゃないって感じました。安心して自分の意見が持てて、そこから担い手になっていくまでの民主主義の過程って、やはり時間がかかるのかもしれませんね。

土井：民主的に育ってないですから、私たち。通っていた学校や、働いていた会社が全体平等主義だったり、点数化されたり、成果主義だったり、効率主義だったりしたと思うんです。じゃあこの教育をぺんぺんぐさで目指しているのはなぜかって言うと、私がそういう風に育ってないから、興味があってたまらないんですよ。保育の仕事を始めたばかりの数年間は、私自身の育ちによる変な癖がいっぱい出ちゃって、自己嫌悪に陥ったり「あ、違った！」とか思ったり、試行錯誤しながらやっていました。まだまだ私も課題がいっぱいだから、お母さんたちも時間がかかるのは当然ですよね。

冒頭に紹介した『ゆるふわ会議』のエッセンスはというと、157頁以下でも

土井三恵子

触れたように、たとえば…

**一人ひとりを大切に、比べない、競争じゃない、効率じゃない、対等である、信頼関係、自発性、お互い様、聞く、凸凹でいい、私語もりもり、相互理解、正しさはひとつじゃない、結論は出なくてもいい、楽しさ、遊び、脱線、失敗におおらか…**

こういう結論の出ない、不確かなことをやり続けているんですよ。これって、民主的な子どもの育ち＝保育にすごく似ているなって思ったんです。しかも、私たちが子どもたちの様子をお母さんにフィードバックすると、お母さんたち自身にも重なったり、リンクしたりする部分があって。ケンカひとつ取っても、子どもって本当に解決上手。大人ってね、解決するまでに半年とか1年とか時間がかかるんですよ。スタッフが見守りながら、解決したように見えても気まずさが残ることもある。だけど、解決上手な子どもたちに教わるんですよね。そうやって親が自身の事情ともリンクさせるから、あとからお話するように、感動と納得感が倍増するんです。

プレーパークせたがやの理事、天野秀昭さんがよく「情動※が動くと人は記憶し、成長する」とおっしゃるように、情動が動くからこそ、これらの大人の体験もかけがえのないものとして刻印されていく感じがあって。私たち保育者が子どもに関われる期間はたった5～6年です。もちろん、その後も遊びに来てもらいたいし、いつまでも人生相談には乗りますけれど、子どもと伴走し続けるのはやっぱりお父さんお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんなんです。そのお母さんたちが子どもの傍らで過ごしていける自信と覚悟を持って、育ててもらいたい。巣立ってもらいたいんです。

野村：いいですね、卒会式の場にいるような気持ちになってきました（笑）。

## 覚悟は徐々にできていく

土井：母たちが母としてやっぱり自分の足で立っていくことを支えるのが、保育者の役割だと思うんです。思春期になったら、一筋縄ではいかないことだらけですよ。でも、あんこに入れるお砂糖は、雑味のある粗糖のほうが味わい深くなるように、煩わしさなどの雑味が子育てを奥深くするかなって。今までぺんぺんぐさは年小児から年中児に進級継続する人は6〜7割くらいだったのですが、昨年8人全員が進級したんです。その際に「あなたたち、本当に覚悟はあるの？」って聞いたお母さんがいて。ぺんぺんぐさは今はスタッフ制だから私は「まあいいんじゃない、覚悟はある程度で」って答えました。でも「もしかしたら、いいテーマをいただいたかも」と思って、年中年長を1年終える頃の母たちとミーティングをしたことがあるんです。「1年間、年中年長母をやってきて、傍から見ているとすごく顔つきが変わった。初めから覚悟を求められなかったけれど、結果として何かしら覚悟が生まれたんじゃないか。変わったことを教えてほしい」と伝えて開いたミーティングでした。すると、まず出てきたキーワードが、

話し合える、強さ、役に立ちたい、変われる、バランスがとれる、ここを居場所にしよう……、失敗しても粘り強くやっていける、話し合えば何とかなるっていう覚悟、何が起きてもみんなと向き合えるという自信……

でした。そして助け合いとは、頼りっぱなしでも助けっぱなしでもいいと知った、と言うんです。見返りがなくてもいい、別のところで誰かを助ければいい。そして豊かで楽しくて、考える生活になっていく。お客様的ではなくなるし、

**やることや役割は増えるけれど、好きにやっていいのかなと思えて、それが楽しくて、気が楽になった**そうです。最後には、「**自分ごとを自分で考えていくと楽しいし、生きている実感がある**」という言葉が出てきて、すごく感動した記憶があります。なんと「楽しい」という言葉が何回も出てきたんです。

菅野：ほんとすごいですよね！大人も子どもも、それぞれ凸凹していて、個性がある人たちが集まるから簡単ではない。でも、お母さんからそんな言葉が出てくるのって「そのままでいいんだよ」って思える安心感がまずあるからですよね。この本で紹介した自主保育も森のようちえんも、プレーパークも、みんなそういう場所だなと思っています。私たち大人が民主的に育ってないから「こうしなければならない」「みんなと合わせなきゃ」って思っているところがある。でも、そのままでいいって言われて、無条件に肯定してもらえる機会があって。自分を好きになったり、相手を認められたりできるのは、きっと最初の安心感があるからですね。「覚悟があるか？」って問われたらビビっちゃうけれど。

土井：覚悟があるのが自主保育ですよ、素晴らしい！本当に自分たちで手作りしているから、卒会後の絆も強く、一生続くものになります。

菅野：自主保育でも、最初から覚悟があるお母さんはいないんですよね。だんだんとできていくもので、自主保育には、いろんなことを乗り越えて覚悟ができた人たちがいっぱいいるから、「ああいう風になりたいな」と憧れに近づいていく感じなんじゃないかな。ぺんぺんぐさの話に戻ると、安心感が子どもにも大人にもあるから、自分ごとにできたり、感じたことを言葉にできたり。それらが楽しいって思えたりするのは、まさに生きている実感ですよ。泣けますねー。

野村：ほんと泣けますよね。今って、大人も子どもも生きている実感が持ちにくい。

土井：だから、生きている実感を持って喜怒哀楽を輝かせている子どものそばにいるからこそ、その振動が大人にうつって、内側からこみ上げてくるんです。葛藤があっても「それでいいんだ」って思えてくるのかも。

## 子どもがまんなかだからこそ

菅野：さっき、子どものケンカはすぐに仲直りできるって言いましたけれど、大きくなるとそんなに単純ではなくなるから、半年以上かかったりもしますよね。その間を耐えるのが面倒くさくなっちゃうお母さんもいるかもしれません。

土井：ケンカの交渉に大人が入る必要がある時は、何が嫌だったか聞くんですが、正解はないんです。強いて言うなら、お互いが嫌な気持ちだということが正解。だから「○○ちゃんはこれが嫌だったね」「△△ちゃんはこれが嫌だったね」「2人とも嫌だったんだね、嫌なことが2人ともちがったね。○○ちゃんはこういうの嫌なんだって」というような自己紹介の〝し合い〟をくり返しながら、時間をかけて関係性がつくられますからね。

菅野：子どもが自分で感じていることが正解。ただ、幼児期に大切なこととして「私はこれが好き」を知ること、と私はよく話すんですが、それらを固定化してしまうと、また違ってきちゃうのかなという気もしています。「こういう人

野村夏子

ですよね」って、カテゴリー化したりラベリングしたりするのも違う。子どもは「あんなに○○が好きだったのに、そういえば、しなくなったね」って変わっていくから。

土井：そうですね。そこも、たしかに不確かで面倒かもしれませんね。さっきの年中長母のミーティングでもあったように、いろいろなことが起きるけれど、「続けていくこと」で楽しさと自信を見出している。子どもがまんなかにいるから、私たちは手を取り合い続けるしかないんですよ。子どもがいるという尊さが、仲良しグループとは違う醍醐味を味わせてくれるんです。もうひとつ言うなら「自由」ほど難しいものはない。自由は放任だったらいいわけでもないし、野放しや勝手気ままとも違う。子どもを尊重しましょうって言っても、子どもの言いなりになるわけでもない。そのグレーの塩梅に向き合えるのは、子どもがまんなかにいるからです。

野村：「白黒はっきりつけなきゃいけない」という価値観の中で育ってきた大人がすごく多いじゃないですか。いい子育てをしなきゃいけない、悪い子を育てちゃいけない、みたいなプレッシャーを感じて、わけがわからなくなって怒鳴ってしまうとか。私もあったんですけど。だからそういうグレーで曖昧な保育の世界で、子どもたちを見守っている親ってなかなかすごい。親もお互いに学び、育ち合う感じがします。

## 代わりが利かないつながりができる

土井：地方にある森のようちえんだと、最初に面接で「覚悟はありますか？」って聞かれるところもあるそうです。ぺんぺんぐさはなぜそうできないのかと悩んだことがありましたが、本書にも出てくる「地方よりも都会のお母さんのほ

うが不安を抱えやすい」という菅野さんのお話を読んで納得しました。森のようちえんでも強弱がいろいろありますし、ほかにも幼稚園・保育所・自主保育・プレーパーク等、さまざまな場があるっていうことが豊かな社会ですよね。その中で、地域性や構成しているメンバーやスタッフに合わせて最適解を探っていくことが大切な気がするんです。組織って本来は「生き物」であるはず。だけど、ちょっと膠着化しやすいじゃないですか。そうすると利用者はお客様になりがちですし、サービス化されやすくなってしまいます。固定化された組織のほうが、安定していると勘違いされやすいのですが、人の集まりは不確かであることが本来は当たり前。民が主であるということは、構成される民に合わせて、変えていくということなんだと思います。

野村：今いるメンバーに合わせて、というところがポイントですよね。唯一無二のかけがえのない存在、代替不可能性っていうんでしょうか。これについては菅野さん、解説していただけますか。

菅野：制度やマニュアルがあって、誰でもできるのがシステム社会です。そうじゃなければ大きな社会では回らないから必要な面もあるんですけれど、この本で紹介している実践って、制度外なんですよね。加藤さんの本でも書かれていましたが、私たちの生きる世界は、行政や企業の世界である「システム世界」と個人や家族の世界である「生活世界」に分かれます。ここで話しているのは生活世界で、代わりが利かない、この人やこの集団じゃなきゃだめっていうところなんですよね。代替不可能っていろんなとらえ方ができるのですが、違う角度から見ると、まさにワンオペ育児の話もそう。こちらは自分だけが、ひとりでやらなきゃみたいなところで苦しくなっている人がいる。やっぱりお母さんとお父さんは代替不可能な存在ですが、それらが強調されすぎて苦しくなっているところが問題なのだと思います。そこに、ぺんぺんぐさが「ひとりで子育てしないで」って言ってくれると、自分だけでやらなくてもいいんだという安心感

につながります。人とつながれるから、安心して手放していける部分もあるのかな。でも、この人たちになら預けられるなという、別の代替不可能な存在に支えられるわけです。ぺんぺんぐさや自主保育などのような実践を外から見ていると、誰がこの子のお母さんか分からない、いろんな人で代わりが利くような信頼関係ができていくのは、いろいろと面倒くさいことを経験しているからこそでしょう。

## 子どもたちの民主主義

土井：子どもの民主主義についてもお話しますね。私たちが学校教育や、親からのしつけなどから受けた生きづらさを6個考えました。私が子育ての中で感じた持論ですが、最近の学生さんにも確認しています。これらの生きづらさを引きずると、子どもも育ちにくいし、大人も子育てしにくくて仕方がないのではと思っています。

### 1．みんなと一緒に平等に

これ、本当は一人ひとりが違っていいわけです。「育ちどき」も違うから、注目される子がいてもいい。平等じゃなくてもいいんです。「今ね、○○ちゃんがこんなに育ってるんだよ」ってみんなの話題の中心にしてもいいんです。うちの子の名前が上がらないなんてクレームする必要もなく、必ず全員「育ちどき」がやってくる。一人が育てばみんなが育ち、みんなが育てば必ずわが子にも還ってくる。だからよその子の育ちを喜び合い、わが子の番になったら喜んでもらえばいい。全体平等に説明しすぎたら、ストーリーが伝わりません。心に残るストーリーが、明日の子育てへの活力になるんです。それから、もし難しさを抱えている子がいたら、保育者が真正面から1対1で向き合い、特別扱いすることもあります。本来は一人ひとり全員が特別扱いだからです。あと、一人ひとりの意見は数では表せないから、多

数決にはならないわけですね。しっかり話し合うことが必要です。

## 2．わがまま言うな、人に迷惑かけるな

これも本当は、「上手に甘える」ことが大切だと思うんです。上手に自己主張しながら折り合いをつけて、多少は迷惑をかけながらもコミュニケーションが生まれる。そのくり返しです。こうして初めて「真の自立」が促されるんじゃないかなと思うわけです。

## 3．人に負けるな

本来は、支え合おう、共存し合おう、比べるのは止めようってことです。私たちは人に負けるなって、いつの間にか思わされちゃっているんですね。比べるなら、昨日の自分と比べよう。

## 4．何ができて、何ができないか

私たちがつい、囚われがちなキーワードです。そんなことよりも、今その子が幸せでいるかどうかのほうが、なによりも大切。幸せでなければ、自らの成長していく力を妨げてしまうからです。

## 5．できないことをできるように頑張れ

塾や習い事など、どんな場所でも言われることですが、本当は凸凹でいい。それぞれの強みを活かし合うからこそ、凸凹が作用し合って素敵なことが起こるわけです。強みを活かすのは当たり前のように思えても、実際は80％の人が長所を活かした仕事に就けていないという世界的なデータ[iv]もあるとか。つまり、20％の人しか長所を活かせていないん

ですよ。しかも、世界先進国の中でも日本は母子ともに自尊感情がとても低いという見方もあります。欠点を正すより、興味あることをとことんやって、この世界への信頼感、自分への信頼感が生まれると、みずから育つ力が最大限に発揮されます。その遊び込む姿が、周りの子たちにもとても影響を与えるんです。これも育ち合いです。

### 6．先生と先輩の縦の関係

大人も子どもも対等で、個として尊重されて、でも言いなりじゃなく、自由と責任がある。「責任を取らせる」ではなく、「結果を引き受ける権利」という意味での責任があることで、生活の主人公になっていく。

これらの6つは、全体平等主義的な一斉指導型授業だったり、答えが用意されがちだったり、偏差値に偏重しがちだったり、同調圧力が強くなりがちな、そんな根強い文化が引き起こしている気がします。「本当は」とお話した部分が、民主的な育ちの場に共通の感覚なのではと思います。自主保育やプレーパークも含めて。

**菅野**：序章でも書きましたが、私、乳幼児期って人間の根っこが育つすごく大事な時期だと思っていて。その中で、「自分のことが好き」ってことと「自分は何が好きなのか」という感覚の両方が大事だと思っているんです。ぺんぺんぐさの卒会式でも、お母さんがみんな子どもについて「土が好きで」とか「虫が好きで」ってみんな「好きなもの」を言っていました。自分で見つけられたものなんですよね。それってすごく大事で、自分の好きなことを見つけるのって時間がかかるんですよ。保育が細切れにされていたら、絶対に見つけられない。

菅野幸恵

# 付録　各実施団体紹介　団体 QR コード

## ○自主保育

自主保育原宿おひさまの会Instagram

OHISAMA_NO_KAI

自主保育 B.B. だんInstagram

BB.DAN.MIYAMAE

ちいくれんInstagram

CHIIKUREN

しんぽれんInstagram

SHINPOREN

青空自主保育でんでんむしInstagram

DENDENMUSHI_KAMAKURA

鎌倉自主保育マップHP

## ○プレーパーク

はるのおがわプレーパーク
（一般社団法人渋谷の遊び場を考える会）

NPO法人
かまくら冒険遊び場やまもり

NPO法人
日本冒険遊び場づくり協会

## ○森のようちえん

NPO法人
青空保育ぺんぺんぐさHP

一般社団法人
モリノネ

MO.RI.NO.NE

NPO法人
森のようちえん全国ネットワーク

＊本書でとり上げた各実践の状況は2022年のものです。自主保育など小さな団体はメンバー構成によって活動内容が大きく変わることもあります。現在の状況は各団体に問い合わせてください。

菅野 幸恵
青山学院大学コミュニティ人間科学部教授
子どもや親の育ちの場としての自主保育、森のようちえん、プレーパークに関心をもち、フィールドワークを 10 年以上続ける。専門分野は発達心理学。前職の青山学院女子短期大学では保育者養成に携わる。著書に、『甘えれば甘えるほど「ひとりでできる子」に育つ』（PHP 研究所）『あたりまえの親子関係に気づくエピソード 65』（新曜社）共著に、『エピソードで学ぶ保育のための心理学ー子ども理解のまなざし』『親と子の発達心理学―縦断研究法のエッセンス』（ともに新曜社）などがある。

土井 三恵子
NPO法人青空保育ぺんぺんぐさ　理事・共同代表・保育士
保育士、幼稚園教諭免許、小学校教員免許、中学・高等学校理科教員免許を持つ、里山保育に熟練した保育士。都心で企業広告制作に携わった後、10 年の北海道での農的暮らしの中で２人を出産。約９年間の療育や保育所等の経験をした後に、2012 年横浜市青葉区に青空保育ぺんぺんぐさを設立。合言葉は「ひとりで子育てしないで」。植物や生きものに詳しく、とくにザリガニ探しにおいては子どもたちの尊敬の的。子どもたちはもちろん、大人たちも頼りにする存在。近著に『大きな空の下の、ちいさな なかまたち～自然と子どもに学ぶ、自由教育～』（理工図書）がある。

# つながりの子育て
## ～子どもをまんなかにしたコミュニティづくりを、問いなおそう～

2023 年 12 月 2 日　　初版第1刷発行

著　　者　菅　野　幸　恵
　　土　井　三恵子

発 行 者　柴　山　斐　呂　子

発行所　理工図書株式会社

〒102-0082　東京都千代田区一番町 27-2
電話 03（3230）0221（代表）
FAX 03（3262）8247
振替口座　00180-3-36087 番
http://www.rikohtosho.co.jp
お問合せ info@rikohtosho.co.jp

© 菅野幸恵　土井三恵子　2023　Printed in Japan　ISBN978-4-8446-0932-2
印刷・製本　丸井工文社

本書のコピー等による無断転載・複製は、著作権法上の例外を除き禁じられています。
内容についてのお問合せはホームページ内お問合せもしくはメールにてお願い致します。落丁・乱丁本は、送料小社負担にてお取替え致します。